

会報

2004. 10. 10

第 38 号

戦没船を記録する会

〒105-0014 東京都港区芝2-8-43 睦マンション206
Tel:03-3452-5085 FAX:03-3452-2711 郵便振替001606-719515

目次

第11回定期総会開催	1
総会へ会員からの意見	2
十年史刊行・第6期役員名簿	2
海王祭・横浜のパネル展	3
海軍の一般徴用船・漁船・機帆船	4-5
徴用漁船の証言・記録集	5
平和のための埼玉の戦争展	6-7
阿波川丸の消息を	8
事務局より・収支報告	8

資料館を平和発信基地に

第11回定期総会開催

戦没船を記録する会の第11回定期総会は、4月24日、東京・浜松町の海員会館に、役員や会員19人が出席して開催され、第10年度活動報告、第11年度活動方針案(会報37号記載)などを審議決定した。

開会に当たって川島会長は、「私の古い友人の高橋君は、太平洋戦争で片腕を失い、まさに片腕の人生を送り、生涯、平和のために活動してこられた。今日も出席されているが、彼の顔を、手を見るたびに戦争は二度としてはいけないとの思いを強くしている。本会も11年目を迎える。いま、十年史の編纂中であるが、ご出席の皆さんや今日まで運動を支えてこられた方々のご努力に感謝しております。国の内外を問わず騒然としているこの頃ですが、何よりも平和が一番大切との感を強めています。今後ともご協力をお願いする」と挨拶した。

報告・方針審議の中では、本会と神戸の資料館との間の関係について質問があり、事務局から『本会からは都度「会報」を送っているが、資料館からは会報やニュース、報告の類は一切送られて来ない。資料館には「支える会」があり、辞めていった元事務局長2人が中心になっているようだが、彼らは「記録する会は任務が終わったので必要ない」としている人たちなので、関係修復といっても、こちらから何も言うことはない。

支える会は決議機関や執行機関がないから、運営方針や責任体制が不明確のようだ。また総会や役員会、役員改選があったという話も聞いたことがない。海員組合が資料館の運営費を出し、勤務員の日当などになっているようだが、その内容も支える会の会費やカンパもどうなっているか分からない。そうかといって資料館館長である海員組合の関西地方支部長が、あれこれ指導しているようには見えない。最近、資料館に行った人から、資料館は5人の勤務

員が毎週1日づつ勤務して、上沢君(元本会事務局長)も週に1回出勤している。杉本君(前同)は年に何回か顔を出している。との話を聞いたという報告があった。資料館をより良く運営するために、今後、海員組合と話し合う必要がある』などと答弁し、様々な論議が行われた。

この問題は、議長(川島会長)が「資料館は本会が作製した資料を提供し、われわれの精神を生かすことを前提に、海員組合が協力して出来あがった。海の平和の発信基地として、資料館が有効活用されるよう、協力して努力していきたい」と発言し締めくくった。

第11年度活動方針については、十年史の刊行については、編集と費用の問題がある。資料のデータベース化とインターネットでの公開は、既存の資料の活用、海労ネットとも協力して取り組む。アルフォート関連資料の整備は、日常の作業として進める。漁船・機帆船の資料収集は研究者や地方の研究者、インターネットなどを通じて取り組みたい。パネル展では独自展として東京海洋大学学園祭、焼津展などへの出展、横浜、埼玉の平和展への参加を予定している、などの提案が決定された。

また、資料や記録の整理、保存のためのデータベース化等について、船舶通信士労働組合から(残存財産の寄付)資金提供を受けることになった経緯が説明された。



総会へ会員からの意見

- 会員の老齢化で大会など、財政面で支障をきたしていると思います。継続的な資金の目あては立ちますか？今後会を維持して行く財源確保が気がかりです。名案がないままでは過ごされませんので。(東海林久三郎)
- 正岡勝直氏の「特設艦船正史」が完成されたそうですね。また、会の十年史も刊行される由、会員だけでなく、一般の方々も広く見ていただきたいものです。(福山善郎)
- いつものことながら直接お手伝いできず申し訳ありません。役員各位に厚く感謝申し上げます。『十年史』を期待しています。(有川好一)
- 戦没船を記録する会と杉本・上沢氏らとの一本化を求めるものですが、話し合いをする余地はまだあるのだと思っています。不自然な形は良くないと思っています。(小林良三)
- 結成10周年、心からお喜び申し上げます。戦没船史の教訓の1つは海運産業は平和産業であると思っています。時はイラク戦争、第2のベトナム戦争化や平和憲法の改悪の具体化という危険な時代に突入しています。だからこそこの流れにこうして奮闘していくべきと考えます。墓標なき海底に眠る戦死者は、私たちが黙って見ていると思います。これを機会に貴会が更に発展することを祈念申し上げます。(小田純市)
- 新会員となりました者ですが、失礼ながら少ない人数、少ない予算でパネル展示会などをなさっているのにはびっくりです。イラク派兵については、私も反対していますが、それは北朝鮮がらみで、ある意味では仕方なかったと思います。自衛隊員が一人も死なずに帰ってくることを願わずにはいられません。(嘉糠武司)
- 今まで一度も出席しませんで誠に申し訳ありません。今年是非出席します。(高橋潤次)

十年史の刊行について

第11回定期総会の時点では、まだ原稿の段階であった「十年史」も、6月には本の形に組み立てられて、その内容の検討と、組み合わせ順序などが検討され、7月にはほぼ完全な形が組み立てられた。この間、時には月2回のペースで編集委員会が開かれ、熱心に論議された結果、8月6日の編集委員会で印刷に回すまでに煮詰められて、それを整理した上で8月11日に印刷所(自由制作所)に回された。

主な内容は以下の通り。

内容はA5版、カラ - のカバ - 付き186頁、カラ - 口絵写真8頁。

巻頭言 「繰返すまじ戦没船の悲劇」

第1章 「海のほかにその墓を持たず」 戦没船を記録する会の創設

第2章 『知られざる戦没船の記録』出版 アルフォートの作製に着手

第3章 戦時海運研究会の記録 米潜のウルフ・パック戦法など

第4章 「戦没した船と海員の資料館」開設 墓標なき海深く眠る御霊に捧ぐ

第5章 「戦争で沈んだ船と人展」の反響と成果 全国各地の平和のための戦争展に参加

第6章 10年間の活動の記録

第7章 「戦没船を記録する会」の継続を確認 組織の混乱を克服して結束、前進

第8章 怒りの海に「なぜ」と問う - 会報への投稿に見る壮絶な遭難記録など

第6期役員名簿、会員・賛助会員名簿、参考資料 現在、第3校が終了し、印刷、製本の段階を経て完成を待つばかりで、10月中には出来あがることになっている。

第6期役員

会 長	川島 裕	国際船長協会連盟名誉会長
副会長	川村 赳	全日本船舶職員協会会長
同	中島 洋	太平洋学会専務理事
理 事	青山 昭元	横浜鷗友会
同	伊東 信	作家
同	上村 徹	元船舶部員協会会長
同	岸本 勇夫	元船舶通信士労働組合書記長
同	栗原 三郎	船員OB
同	小島 定吉	現代写真研究所事務局長
同	河内山典隆	海事ジャーナリスト
同	小林 三郎	海の平和問題懇談会代表世話人
同	小林 良三	船員OB
同	新藤 博志	元横浜鷗友会会長
同	豊田 健造	船員OB
同	中原 厚	元全国戦没船員遺族会常任理事
同	新関 昌利	元公立学校教師
同	二宮 淳祐	全日本海員組合名誉組合員
同	正岡 勝直	船舶史研究家
同	溝邊 修	船員OB 関西支部長兼務
同	矢内丑五郎	船員OB
同	吉田 敏長	横浜鷗友会会長 横浜支部長兼務
常任理事	篠原 国雄	海上労働ネットワーク事務局長 事務局長兼務
監 事	桑島 直矢	船員OB
同	小島 久子	税理士
顧 問	笹木 弘	東京商船大学名誉教授
同	田川 俊一	弁護士
同	山田 早苗	船舶史研究家

海王祭でパネル展開催

伯父さんは隆亜丸で戦没

東京商船大学と東京水産大学が合併して、新たな学校法人「東京海洋大学」が発足したが、旧商船大学伝統の第44回「海王祭」が6月5・6日の両日、越中島キャンパスで開かれ、戦没船を記録する会のパネル展が開催された。

展示内容は戦没船アルフォート写真、トラック島の戦没船と遺骨、太平洋戦争以後の戦争・紛争による船舶・船員の被害、大久保画伯の「戦時徴用船の最後」その他。

また、会場に持ち込んだラジカセから、ぼりばあ丸遭難通信を録音したモールス信号が流され、遭難現場の緊迫した交信の様子がうかがわれた。テーブルの上に置かれた電鍵から流れるモールス信号の発信音は、来場した子供たちの興味を引いていた。

会場の一部には、海員組合の大野一夫君の油絵「雷撃」や「国会を包囲する風」が飾られ、彩りを添えていた。

海王祭ではグラウンドや他の場所で様々なイベントやゲームなども行われたが、第2日目は雨降りて屋外の行事が中止になったため、パネル展への入場者が増加し、2日間で400名を越える参観者があった。



参観者の老婦人が「私の叔父さんも船員で、千島の方で戦死したと聞いているが、船の名前も何処で死んだのかも分からない」と語り出した。終戦の年49歳でなくなった父親の上の兄だから、50歳過ぎていたと思うという。入江音吉さんというお名前と本籍地長崎県だけ聞いて、戦没船員名簿で捜してみたら出てきたが、生年月日と職名と遺族名が記載されていない。

この叔父さんの乗っていた船は、隆亜丸1,915トンで、昭和19年3月13日、千島列島の新知島から急遽工兵隊と資材を積んで、松輪島に向かう途中雷撃を受けて沈没。乗船中の船舶工兵隊58名、

船砲隊23名、船員43名全員が戦死している。

「叔父さんの船が分かりましたよ」と越中島のマンションに電話したら、雨の中を取りにこられた。関係書類のコピーをお渡ししながら説明したら、涙を流し、声を詰まらせながら、従兄弟たちに知らせてやりたいと受け取られた。

パネル展を開く度に、こういう形で戦没船員のお知らせが分かることが何件かある。その度に、戦没船員遺族の戦後はいつ終わるのか、つくづく考えさせられる。

2004 横浜の戦争展

アメリカの核戦術に憤り

敗戦後50年を契機に、1995年から毎年開催してきた横浜の戦争展も、今年で10年目を迎えた。また本年は、横浜市議会が1984年10月2日に議決した「横浜市非核兵器平和都市宣言」から20周年の記念すべき年でもある。

「戦没船を記録する会」は、この戦争展に最初から参加し、港町横浜市民に太平洋戦争中にいかに多くの船員が犠牲を強制されたかを、分かりやすく解説をする展示を続けてきた。今年の戦争展は5月28日から30日までの3日間開催された。今年の特徴としては、米軍のイラク侵略から1年あまりが経過する過程で、侵略者に対する民衆の反発と抵抗が日に日に増大し、毎日尊い命が失われている実情を、より多くの市民に訴えるべく、最近までイラク各地を取材して帰ったばかりの、ポートジャーナリスト森住卓さんの現地報告を企画した。

また、戦争を知らない若者たちによるトーク「ぼくたちは平和を築きたい - 若者が語る平和」を企画し、多くの若者たちが参加して熱心に討論し、頼もしい限りであった。

戦没船を記録する会としては、従来の展示に加え、1954年3月1日に南太平洋ビキニ環礁で行われた、アメリカの水爆実験で被爆して50年を迎えた第5福竜丸のパネルを、都立第5福竜丸展示館から借り出して展示した。広島被爆者の会の展示と森住さんのイラクにおける劣化ウラン弾による奇形児の写真と重ね合わせ、すべてアメリカ軍によって行われていることに、深い憤りを新たに示す展示であった。

今回の展示会には、珍しく右翼団体の街宣車の妨害もなく、個人的に見に来て嫌味を言って帰る程度であった。

海軍が一般徴用船とした

漁船・機帆船の最後

正岡 勝直

8月13日の夜遅くテレビで、戦没船員の遺家族である2人の婦人が、なき主人の遺影を求めている姿の放映を見る機会があった。

その映像を追っているうちに、「記録する会」が関係する最近の展示会で、アルフォト写真を見ながらの来訪者との対話の中で、戦争を体験した人たちの少なくなったことに、時代の経過を体で知ることになった。

「記録する会」もすでに10年の軌跡を残している現在、戦没船といえば、客船や貨物船、タンカーなど大型船がイメージとしてあるが、戦没船員6万余名のうち、その半数は太平洋戦争で哨戒や局地輸送など、戦争の流れの中で人知れず、影の力となった漁船・機帆船の船員であったことは、一般にあまり知られていない。

長年、日本海軍が徴用した船舶を調査研究している過程で、数年前に直接海軍の戦力となった特設艦船以外で、「一般徴用船」と呼称された漁船・機帆船の戦歴を纏めたことがあり、その当時の資料を基礎に、昭和12年の日中戦争以後、太平洋戦争終結までに、海軍が何隻くらい徴用したかの調査に取りかかり、現在の防衛庁の防衛研究所戦史部に保管している資料で、それらに関する当時の閲覧収集したのを整理すると、現在約3,500隻余を集計している。

この基本的資料としては、戦時中に「軍機密」として海軍省兵備局第3課が整備した「徴用船舶名簿」があり、各船毎に徴用と解用された年月日(中には喪失年月日もある)が記されていて、用船期間を見る参考となるが、徴用と解用の場所が記載されていない。

この資料は、徴用された時点で「配属先」が確認でき、戦歴調査の基礎とすることができるが、配属先が前線などの場合、進出途上で戦況の変化などにより、現地指揮官の命令で変更されることがあり、問題を残している。

海軍は横須賀・呉・佐世保の3鎮守府によって所管区域を設定し、それぞれの鎮守府を通じて、民間船舶の徴用を行った。徴用される各船の基本的資料は、運輸通信省が毎年度発行していた当時の「日本船名録」に記載されている。

これに準拠して照合すると、所有者の氏名が異なっている場合もあるが、船籍地名が記載されており、都道府県別の確認ができるとともに、建造された年月日も確認できる。徴用される漁船・機帆船の船籍地を所管する鎮守府が、海軍の徴用基準を準用したのではないかと推定される。

ここで問題なのは、「日本船名録」に記載されているのは、総トン数20トン以上の登録船のみであり、19総トン以下の場合は記載されておらず、徴用船の相当数がこれに該当するため、調査不能のことである。

徴用された記録から勘案すると、戦況の推移によって、大きな作戦開始前に所要部隊への徴用が行われ、戦況の進展によって対象船型がある一定の傾向にあり、日中戦争当時から太平洋戦争緒戦時にかけては、短期間の徴用や南洋群島では現地漁船などの大量徴用が見られる一方、先に解用された漁船・機帆船が再徴用される場合もあった。

戦況が悪化する昭和18年末以降、特に船舶被害の増大と計画造船による船舶建造計画の低下が戦局に影響し、陸海軍が船舶確保に躍起となる時代には、その不足を漁船・機帆船で補充せざるを得ず、それらの争奪戦もどきの徴用が行われ、より優秀船確保のため、先の鎮守府毎の所管区域に関係なく、海軍省の全ての徴用船を掌握する「兵備局」が、所要船舶を直接徴用するようになった。

戦況の激化で船舶喪失が顕著となり、日本船名録に登録される前に喪失して、未登録の場合は調査事項の空白を余儀なくされている。

敗戦直前、本土周辺にB29により大量に投下された機雷除去のために、西日本各地に在籍する多数の漁船・機帆船が徴用、買収されている。また、海軍は敗戦直後、戦後日本再興へ向けた水産資源確保のため、漁船を8月10日に遡っての解用したが、占領軍の命令で中止となり、機雷除去のため再徴用されるなど、船主にとって多くの問題を残している。

このような時期の漁船・機帆船の徴用や解用状況は、敗戦前後の混乱期の資料によるため、整理確認には資料不足は免れないが、その隻数は大まかに見ても500隻を越えるものと考えられる。

最後に、残された資料から、敗戦直後頃の記録を見ると、戦後解用された漁船が、所定港から船主所在の港までの航海用の燃料請求 当該船舶の外地での所在確認の要請 税金支払いのための喪失確認証明書の請求 退役した海軍士官等による、損傷沈座する機帆船を引揚げ、物資輸送で再建日本の一助にするためとの早急な払い下げ申請書 漁船船主では、水産食料確保と従業員や家族の生活維持への早急な徴用解除を求める申請書 などが残

されている。

一方、外地に配属された場合の一例では、昭和15年11月、遠洋漁業へ従事中に海軍に徴用され、12月7日に青島方面特別根拠地隊に配属された第2福栄丸(42トン、船籍地=串木野)は、砲艇として海上封鎖の任務に従事していたが、昭和20年5月から補給関係に従事中敗戦を迎え、待機中の11月、突如、中国海軍士官と称するものに接收された。

当時所在海軍部隊は日本へ引き揚げており、乗組員は本船を放棄せざるを得ず、青島在住の日本人宅に寄寓、12月末に博多に上陸した記録が残されている。

昭和20年11月30日で日本海軍は廃止、12月1日より第2復員局に改編されるなど、制度の激変や相次ぐ占領軍の指示などで、事後処理は難航していた。

徴用された漁船・機帆船の船主は、喪失船舶の保証金支給などに期待をかけ、戦後社会の激動に曝されていた。傭船料や補償金は、大手船主へは直接支払いもあったが、一杯船主などの場合は、当時の漁業関係の統制団体への一括支払いの場合があり、一家眷属総員戦死の場合などは、補償金が何処に行ったのか不明の場合もあった。

もっとも、戦後、戦時利得税の関係から補償打ち切りの形で戦争の歴史は時代の彼方へ消えていったのである。

徴用漁船の証言・記録

第5福一丸

150GT、静岡県焼津港、S8年6月竣工、S15、12月海軍に徴用され、16.9.5第7防備隊(父島)配属、S17.2.1第1監視艇隊配属。当時の乗員は軍人26名、船員10名(焼津出身者がほとんどで、親族・縁者が多かった)。

航海士の近藤松一は両親宛に次のような遺書を送った。

『遺書』

小生 今回皇師に召されて勇躍征途に就く上からは、尽忠報告-死以つて君恩に奉ずる覚悟なり、先陣に曝す身はいとわねど、もしも不幸敵弾の為名誉の戦死成志たる際は、決志て突くことなかれ。吾は護国の鬼となり、幾歳までも靈魂は生きて君国を守護するなり。

而して吾亡き後家督は3男、三吉を以つて樹つ可志。

亦 妻ちえ事は吾とは浅き契りなり志も、永世吾を守らん覚悟あれば弟と共に苦楽せよ。未だ嗣子も無ければ、他家へ嫁するも亦可成り。

未だ両親共に壮健なればその他家事上のこと共一任するなり。

滅私奉公に当たり遺言の通りなり、確く守りくれよ。
昭和17年書 近藤 松一

また、次の和歌等が残されている。

木の葉にも しとしき艇をあやつりて
御陵威かしこみ守るぞこの海
たゆまなく ひるはひねもす夜もすがら
御陵威かしこみ垣ぞ守らん

このような心境は、近藤松一のみならず、当時の特設監視艇で勤務していた軍属には共通のものがあつたと見られる。

第5福一丸とともに散華した人々の自宅へ、「2月18日 敵機動部隊と交戦、名誉の戦死」と記された公報が届けられた。

第5福一丸は、米側の記録等から昭和20年2月18日、30-00N14100E付近にて戦没したものと見られる。

昭和20年2月中旬の南哨戒線区の状況

米機動隊が北側より硫黄島攻略を目指して南下途上わが南哨戒線をかく乱・殲滅しようとしたため、激しい交戦となった。

16日1000頃、第3感応丸が単発機と交戦、戦死4名、重傷7名、銃弾船体貫通40箇所以上。同艇を護衛して下田に帰投中の第36南進丸は敵艦載小型機の攻撃により沈没。

○17日1028頃、監視艇3隻が敵機4機と交戦。第2栄福丸は火災発生・爆発 轟沈し、戦死7名、重軽傷12名。第3松福丸は船尾の爆雷に機銃弾が命中、火炎が吹上げ、機関室には70発以上の銃弾を受け、戦死3名、重軽傷3名を出したが沈没を免れ、第2栄福丸の生存者の救助に当たった。

○17日2050頃、監視2隻が機動部隊と交戦。栄福丸は「ワレ艦砲射撃をうく、全員敢闘死地に就き護国の鬼とならん、天皇陛下万歳」の発信を最後に連絡を絶った。第5宝栄丸は何の連絡もなく消息をたつた。

○18日0246頃、第35南進丸は30N135.5E付近で小型概数十機と交戦、被弾炎上・沈没。

○18日1035頃、第17長運丸、第3共和丸が小型機と交戦、2艇とも沈没。

○18日(時刻不明)、勝栄丸、第5福一丸、第5万栄丸が機動部隊と交戦、3艇共沈没。

3日間で14隻の沈没船を出すとの大被害であつた。

「戦争のない世界を作ろう」

平和のための埼玉の戦争展に参加

「平和のための埼玉の戦争展」(以下「戦争展」)が7月28日から8月2日までの5日間、さいたま市浦和駅前のコルソ7階で開催され、本会は今年もこれに参加しパネル等の展示を行った。1999年に初参加して以来毎年参加をしており、今年で6回目となる。

イラク戦争が泥沼化しており、イラク情勢を中心に諸紛争を平和的手段で解決するのか、暴力(武力)的手段で解決するのが世界的に問われている状況下で開かれた今年の戦争展。

来場者は5日間で1万人を越えたとのこと。各コーナーともに立ち止まって見てゆく人が例年より多く見受けられた。イラク戦争が影響しているのかもしれない。

今回、本会は、割り当てられた約2m×8mの展示スペースに、

- 1、太平洋戦争以降の戦争等による日本船舶・船員の被害
- 2、臨戦態勢の例証
- 3、船員の戦後は終わっていない
- 4、太平洋戦争での商船・船員の被害の一端とアルフォト

等を展示した。

海を戦場にしてはならない

今回も「どんなものを出展するか」を事前討議したが、船員の立場からイラク情勢に関連して「民間船舶の軍事行動への動員、民間船舶へのテロ攻撃」等、船員に被害が及ぶことがあってはならないことをアピールする観点の1つとして、「太平洋戦争以後の戦争等による日本船舶・船員の被害」のパネルを作成・展示した。

内容的には、冒頭に次のパネルを掲げ、

海を戦場にしてはならない!

太平洋戦争において、船員は死亡率で軍人を上回る犠牲を強いられ、その反省の上に立って、犠牲を繰り返さないことが戦没した先輩や同僚の御霊に報いることであるとともに、後輩への義務であるとのことから、懸命な努力を重ねてきましたが、戦後においても船員は、世界のあちこちで起こる戦争・紛争・軍事訓練・核兵器開発実験等により多くの被害を受けてきました。

その一端を「太平洋戦争以後の日本船舶・船員の被

害」として展示しましたが、われわれが把握した範囲内だけでも、その被害は、延べ462隻の船舶におよび、死亡137人・負傷130人となっております。

イラン・イラク戦争では、ミサイル・砲・銃撃、臨検・拿捕に苦しめられたことは記憶に新しいところです。現在、イラクにおいて世界の平和に逆行する危険な戦争が展開されており、日本も危険な関与を強めております。このことは、われわれにイラン・イラク戦争当時の危険、いやそれ以上の危険性を呼び起こしております。それは船舶へのテロ攻撃であり、船舶の軍事行動への動員です。

『海のほかにその墓を持たず』、まさに船員とその親族にとってはその死に目にも会えず、死んでからも遺骨さえ家系の墓に眠れない。「海を戦場にしてはならない」は船員の捨て去ることのできない想いです。

次に、太平洋戦争の残存機雷による被害 近隣国による銃撃・拿捕 朝鮮戦争 ベトナム戦争 第4次中東戦争 イラン・イラク戦争 核実験・潜水艦・軍事訓練等の年表に、写真6枚、被害を伝える新聞記事切抜き6枚(別掲写真参照) - などのパネルを展示した。

世界的には戦争・紛争・軍事訓練・兵器開発実験等が続いており、世界の海を走り回る日本船舶・船員はそれらの被害を受け続けていることを多少アピールできたと思われるが、「自分たちへの被害のアピールのみでは、片手落ちではないのか? 朝鮮戦争やベトナム戦争では、日本船員が乗組んだ船が兵員・兵器をはじめとする諸軍事物資の運送等の戦闘参加により、被害を与えた面もあったのではないか?」との指摘があった。



今回は、船員の立場から自分への直接被害に対する危機感をもとに、イラク戦争や海上での戦禍への反対表明が主眼であったが、見る人によっては「片手落ち、不十分、正しくない」と受け取られたものと思われる。

原則を踏まえ、時と場所に適合した展示・アピールが必要であるが、「現実的な適合」については、周到な分析と論議が求められるところである。

臨戦態勢の例証

「2」については、有事法制に関連して、太平洋戦争前にも日本軍は開戦の数年前から、開戦を想定して民間船舶の徴用時の改装・武装図の設定など具体的準備を進めていたことを、「淡路山丸」「君川丸」の実例をもって表示した。

時間をかけて説明すればそれなりにわかってもらえたが、展示パネルのみではわかってもらえていないようであった。準備不足でした。

船員の戦後は終わっていない

「3」については、戦没船員の遺骨収集は軍人等に比べて進んでいないことから、「船員の戦後は終わっていない」と題して、トラック島付近の海底に眠る戦没船員の遺骨写真・戦没船遺影写真(日本人ダイバー撮影)を展示し、多少の解説をつけたが、「2」と同様の反応であった。これまた準備不足の感を免れなかった。

来場者の様子

本会の展示コーナーにも、多くの人を訪れ、立ち止まって見てくれた。

本会会員は、一応「解説員」という名札をつけて解説に当たったのだが、移動する不特定の人に対して、最初の切り出しが難しい。うまく入ってゆかないと、無視されたり、笑われたり、怖がられたりで聞いてもらえない。質問してくれると話しやすいし、張り合いもあるのだが、質問は少ない。

こちらサイドのパネルを掲げて「いい話をしてやるから聞け」では押し付けがましく対等の話し合いではない。そもそも設定がよくないのかもしれない。展示会との形ではやむをえないのかもしれないが。

高校生の来場者が比較的多く、「就職状況がよくないし、戦争に行くこともないだろうから、自衛隊に入隊することとした」

「戦争はなくしたいが、戦争で儲かる人、戦争がないと困る会社・人、戦争のための軍隊・兵器などがある以上、戦争がないとはいいいきれない。特に先制攻撃方針を打ち出している米軍が、北朝鮮に攻め入る可能性が高い。そのときは自衛隊が米軍の先

鋒隊になる危険性が強いよ」

との会話もあった。

若い人たちが、自らの将来生活と戦争とのつながりを意識させられ始めていることがうかがわれる場面であった。

戦争、特に日本が巻き込まれるものがあったりはならないことは言うまでもないが、多くの人たちが、相当の努力をしないと、戦争も阻止できないことも現実といえよう。

戦争展全体の流れ

「戦争展」はもともと「戦争の悲惨を知り、平和の尊さを学ぶ」ことを目的としてスタートとした運動だが、イラク戦争がおき日本もこれに加担している状況の下では、これまでのように「知る・学ぶ」水準にとどまることはできないとして、「イラク戦争など現代の戦争に対して何ができるのか、平和のために何をしたらいいのか」を考えあう場にしようと、「戦争のない世界をつくろう(Let's create world without war)」をメインスローガンに、新企画を大幅に取り入れた。

具体的には、

イラク戦争の現状と背景

現代戦争の起因・背景

世界の平和運動の歴史と現状

国連(ユネスコ)の平和活動

平和運動をした人々に学ぶ

第5 福竜丸の被爆事件と非核運動

「戦争と平和」を語り合う「絵手紙」

途上国での建設と平和構築の取り組み

地球・自然環境への取り組み

行動する「反戦・平和」

などが取り上げられた。

戦争被害など実態のあるもののパネル化は比較的容易だが、「反戦・平和」は図形表現が難しいので関係者は大変苦労したようであるが、考え・探し求めて「武力によらない平和の可能性や展望」をパネル化し、新たな関心を呼んでいた。

来場者の感想として、「近隣諸国への侵略や虐殺など、初めて知ったことが多かった」「一番印象に残ったのは広島と長崎の被爆の実相です」があった。過去の実態を伝えることはまだまだ必要と思われる。

一方、「平和のためにがんばる姿が同じ世代の若者から『かっこいい』と見られ、勇気が出てきた」「世界や日本がこれから向かっていく方向に不安を持っていただけ、きっと今からでも変えられる、変えなければならないと思った」など、若い人の明るい反応もあった。(2004.10月 栗原三郎)

阿波川丸の消息を

会員から調査の依頼

本会会員の阿曾 一郎さんから次のような調査の依頼がありました。心当たりのある方は、事務局までご連絡いただければ幸いです。

『昭和20年8月10日、朝鮮半島清津沖の日本海で雷撃を受けて沈没した「阿波川丸」川崎汽船の乗組員の方、または船舶警戒隊の方の消息をお知らせ下さい。私は甲板員でした。上海、大連、羅津の航路に就航していました。戦没船の記録として、ぜひお願いします。』

なお、戦時船舶史によると、阿波川丸(6925 総トン=川崎汽船)は「昭和20年8月10日、朝鮮羅津港在泊中空爆を受け被弾沈没。船員17名戦死。」となっています。

事務局より

「十年史」刊行の作業に追われていて、会報の発行が遅れたことをお詫びします。十年史は10月中に完成し、会員の皆さんにお届けする予定です。出来るだけ多くの人に読んでもらいたいと思いますので、回りの人に勧めて下さい。そして1冊につき2000円のカンパをお送り下さいますよう、お願いします。今年度の会費未納の方はその方もよろしくご協力をお願いします。

本会の集めた資料や記録、出版物を後世に残し、多くの人に見てもらうために、データベース化やインターネットによる公開、CD・ROM化などを計画しています。そのための費用は、船舶通信士労働組合が提供してくれることになっています。多くの人からアイデアやご意見を寄せていただければ幸いです。

パネル展については、6月に東京海洋大学の越中島キャンパス(元東京商船大学)での本会独自展開催と、5月に横浜で、7月末に浦和で「平和のための戦争展」に参加しました。

今後、本会の作成した戦没船のアルフォトや、戦没船関連の資料、写真パネル、図表、年表などを分類・整理して、それらを組み合わせることによって様々な展示会に対応出来るようにすること、他の展示会などへ貸し出し出来るようにすることなどを計画しています。ご協力をお願いします。(S)

【収支報告書について】

この報告書は今年度前期6ヶ月のものである。会費収入はほとんど当年分の納入で、正会員分は前年とほぼ同額であるが、賛助会費は半減した。

参考までに第11回定期総会で報告された第10年度の会費納入は正会員会費30万円、賛助会費11万9千円であった。

事業収入は主に理事の正岡直勝氏の著書「日本海軍特設艦船正史」の売上で、この分の前年度分収入は3万1200円であった。

支出では通信費の中に前記「正史」の送料が含まれ、事業費にその仕入額が含まれている。印刷費は主に「十年史」の原稿を数回にわたって編集員全員にコピーして配布、検討したこと、及び校正刷りのコピー代などである。

旅費交通費は、今まで定めがなかった旅費について今次総会で、交通費実費、宿泊費は海員会館並みとして一泊5000円とすることを決め、気仙沼展の担当者に支給したものである。

その他の項目は通常並みである。(篠原)

収支計算書

戦没船を記録する会

2004年4月～9月分合計

基本会計 (円)

科目	金額
前月より繰越金	150,000
入会金	
合計	150,000

一般会計

科目	金額
前月より繰越金	412,234
会費	294,000
賛助会費	60,000
寄付金	67,000
事業収入	232,250
雑収入	13
収入合計	1,065,497
通信費	67,200
会議費	9,500
印刷費	107,000
事業費	196,761
旅費交通費	92,130
事務所費	120,000
消耗品・雑費	50,236
支出合計	641,854
次月に繰越	423,643
総計	1,065,497

繰越金内訳

基本会計

銀行預金	150,000 円
合計	150,000 円

一般会計

現金	81,909 円
振替貯金	185,305 円
銀行預金	30,116 円
同	126,313 円
合計	423,643 円